

文学に対するモヤモヤ。この質の低さ、このレベルの低さ、なんでこんなもので満足して喜んで書いたり読んだりしてるんだろうといふモヤモヤ。

も芸術家ともあろうものが、権力とか権威とかに自分から進んで擦り寄つて行くという、この致命的な欠陥。これは、文学者でもなんでもないだろうと。それから、派閥。俺がデビューした頃は歴然とあつたんです。船橋学校とか、丹羽学校とか。
代ええ、聞いたことがあります。
丸ええ。それはひどいことしてたんですよ。どうしてわかつたかというと、編集者は俺の前だと安心するのか、全部本音を言うんです。俺がまだガキでどこの派閥にも属してないと思つて。だから俺の耳に全部入つてくるんです。俺は聞いてないふりして、聞いていたわけ。向こうは、こんなガキに何を言つてもわかんねえんだろうなと思つてたんだろうけど、こつちはそれつからしの商社の、しかも通信部にいた。通信部つてのは暗号の解読から何から情報を全部握つているところです。これはもう、おかしいなこの世界は、と思つた。
ある時 編集者に言つたんですよ。「ちょっとあんたらガキっぽくないか」と。普通の企業では有り得ないような仕事の仕方をしていると。つまり、学生の延長だよと。そう言つたら、「これがいいんだよこれが文学の、出版社のあり方だよ」と。
当時は本当に景気がまだよかつたから、書けば右から左へと原稿が飛ぶように持つていかれて、本になる。売れる、儲かる、という時代だつた。俺はその頃、絶

対にこのままじや将来どうなるよと言つたけど、も耳を貸さなかつた。それがまず一つのモヤモヤ。文壇に対するモヤモヤ。なんといい加減なことを書いていいのか、という。

『夏の流れ』で芥川賞をとつたときに、強烈な違和感を持つたんです。

丸文部省の大臣になりたいとか、そういうことを狙つて、いた。でも、あとで聞いたから、彼は外務大臣を狙つてたつて。バカだねえ、身の程知らずのやつ。どうやってデビューしたかというと、自分と同世代の新人を援護するんです。つまり、開高健、大江健三郎、石原慎太郎、ほとんど同時に出てきましたから。ああいう連中の援護射撃をばんばんやつて、大御所をぶつ叩く。それで、一緒にのし上がるという手を考えたんですね？ 代代なるほど。寄生虫方式ですね？

やることになった。先輩の芥川賞作家と対談する企画で、真冬に編集者が連れて来たんですよ。

そしたら、あつちは俺の顔をまともに見れねえで床ばかり見てるんです。「中上さん、これあんたのための対談だから、俺は黙つてるから、好きなようにしゃべってください。言いたいことを全部言つてください。俺は聞き手に回りますから」って言つたんだけど一言もしゃべらない。

へえ、そうですか。

丸代 それで困つて、誘い水をいろいろ向けたんだけど、「ええ」とか「そうですね」ぐらいしか言わない。これはものすごいシャイなやつだなと。それじゃあ原稿にならないから、結局俺もか

丸 そう。屋根につららがあるから、「あれでオンザロックするからおまえとつてこい」って、それで編集者に「取りに行つたの?」って訊いたら、行きましたよつて。言うほうも言うほうだけど、取るほうも取るほうじやねえの、って。そんなの目の当たりにしていたからね。文壇ついていつたいなんなんだろ、作家と編集者の関係つていつたいなんなんだろうと。

俺、いつも編集者に言つていたのは、編む人と書く人は対等なんだよつてこと。本当は簡単な仕事なんだよ。やくざな仕事だつたら、命がけでやるようなこともあるけども、たかが原稿のやり取りで命にかかるわるようなことは滅多にない

丸 ということで、くたら
ない仕事もいっぱいやつた
んですよ。砂漠をオートバ
イで縦断するとか、一ヶ月
かけて。サファリラリーを
追跡したり、冬のロッキー
山脈を四輪駆動で踏破して
くるとか、アホな仕事をた
くさんやつて。
でも、そういう仕事をや
りながらも、小説を汚すこ
とは絶対にしなかつたんで
す。なぜそうできたかとい
うと、書くのやめてたから
です。三十歳をちょっとす
ぎて、そういう仕事がばか
ばかしくなった頃に、『谷
底』という短編を書くこと
になつて、時間があつたも
んで、十回くらい書き直し
たんです。そしたら、書き
直すたびによくなつていく
のがわかるんです。
それで、俺は今までなん
て最低な仕事をしていたん

対にこのままじや将来ダメになるよと言つたけど、誰も耳を貸さなかつた。それがまず一つのモヤモヤ。文學、文壇に対するモヤモヤ。こんないい加減なことをやつていいのか、といふ。

それから出版界に対するモヤモヤ。出版界の人たちというのは、一般の人が思つてゐるほど文學に精通しているわけではない。文學に対して眼力を持つてゐるわけではない。ただ、大學を出て一流の大手出版社に入社しましたとだけなんです。實際、文學に対する見識とか、深みとか、洞察力とか、まつたく欠落している連中だということはすぐにわかつた。それでも、一流編集者、名編集者と言われるのは、書き手たちが、自分の原稿を載せてもらいたい

文壇に對する疑問

まつちやつた。江藤淳はあらゆるものを利用するものが得意で、文壇はまた中上健次を後継者として持ち上げたんですね。

なりしやべったんです。
最後に「今日は俺が一
べつて行間は埋めたけ
全部削つていいから。あ
で冷静に自分の言いたい
とを書いてください」と
うことになつちやつた
そつするのかなど思つて
送られてきた雑誌を見て
たら、俺が一方的にし
べつてる。編集者に電話
かけて、「俺があれほど言
たのに、なんでこうなつ
んだ。本人に言つたの
よ?」って訊いたら、「言
たんですけど、これでいい
たんですねよ」とつて。
後日談があつて、対談

から、と。簡単な話をややこしくしてゐるんですよ。

一作品書くのにどれぐらいいの苦悩が付きまとうかつて騒ぐ作家がいるけど、バカじやねえのつて。こんなもんサラサラ書けないようで、そんなの才能も何もねえよと。才能のないやつがこの世界にいっぱい入ってきてるんですよ。

代 うーん。

丸 才能がないものだから、すぐネタが尽きるんですよ。それで、苦悩だとか、生きの苦しみだとか、変な言葉を使いだす。それはなりよなど。もう、これは引きするしかないなど、このモヤモヤを。そして引きずつてゐるうちに、俺が考えた一つの答えは、「もう面倒くさい」と。誰からも尻を蹴つ飛ばされないで生きられるな、この世界で

だ。このぐらいやつて初めて文学足り得るんだなど、今読めばたいしたことないんだけど、当時はそう思つたの。こういうやり方じやなきやいかんなということに気付いたんです。奥深さもわかつた。文壇のバカな連中のアホな小説より半馬身とか一馬身先に出て、調子付いてるんじやねえぞ、とすごく反省したんです。

それで、カミサンに言ったんです。「もう、エツセイをやめて小説に集中するから。ということは時間を持たつぶりかけるから、食えなくなるから覚悟してくれ」と。そしたら、カミサ

ンは、「もう慣れますから、大丈夫です」と。で、やりましょうということで。それから徐々に、徐々に、本格的に小説にのめりこんだんです。

代 それで『千日の瑠璃』を書かれたなんですか？

丸 『千日の瑠璃』にくるまで、いろいろ短編で試してたんです。で、感触を得てから書いた。

代 『千日の瑠璃』で先生を知ったという方は多いですよね。

丸 多いです。今にしてみれば、あれは一回改訂してあるけど、まだ不満足なんですね。（次号につづく）

完本 丸山健二全集

日本が世界に誇る作家 丸山健二のすべてをお届けする

【第三回配本】2018年3月下旬発売
『魔道記』

【第三回配本】2018年3月下旬

【あらすじ】
時流に乗り遅れまいとする一日市場村、それと広大な巡りヶ原を挟んで対峙する有明村。その村には三十年に一度、神社の奥社に奉納されている青い旗を取りに行くという儀式がある。
今年、その役を果たそうとする「私」とその家族を中心、これまで何百年となく維持されてきた有明村の精神と人間としての自由を守るために、死をも厭わない人々を描く。

• 100 • 中国社会科学院研究生院学报 2010 年第 3 期

【第四回配本】2018年6月下旬発売
『目に泣く』(全一巻)



※ご注文は、お近くの書店または弊社までお申込ください。